

最近の日中関係と歴史教育

副島昭一

2005年もすでに半ばを過ぎ後半期に入った。小泉政権の外交とりわけアジア外交に関する無定見さは目を覆うばかりであることについてはかなり広く認識されるようになってきている。そのアジア外交の中で今年前半の日中間の最大の事件はいわゆる「反日デモ」であろう。この春、連日テレビで繰り返し報道された日本公館などへの投石とそれを取り締まらない警察のイメージはかなり強く日本人に印象づけられた。現在および今後の東アジアの情勢、行方にも影響を及ぼしていくであろう。これについてはすでに多くのことが語られているので、ここでは私が日頃接する学生の意識という観点から述べてみたい。

私の担当している授業の一つは東アジアの近代の歴史を内容とするもので、この講義は中学社会、高校地理歴史の教員免許科目の必修科目でもある。受講生は年によって出入りがあるが今年は出席20名前後の比較的こぢんまりしたクラスである。このクラスで5月『反日デモ』はなぜ起こったと考えるか」と題するレポートを課した。執筆期間は約10日で新聞、インターネットなどで調べて自分なりの考えをまとめさせるもので、根拠となるデータについて明記するように指示した。このレポートはすべてメールで提出させた。というのもこのくらい的人数なのでそれをホームページに掲載し、それを相互に読ませてそれについての意見を再度書かせようと思ったからである。原稿全部を学生の人数分コピーして配布するのはかなりの手間だし、資源の無駄使いでもあり、保存にも不便である。

実はインターネットのホームページを開いて授業に使い始めたのは昨年のものである。ファイルの作り方やそのファイルのアップの仕方などについて最低限のことを身につける必要があった。自分の年齢を考えるとこういうことをやれる最後の機会かも知れないという思いもあった。今さら無駄なことに余分なエネルギーは使わない方がいいという思いもよぎったが、いったん気になり出すとやっとならぬと落ち着かない。性分だろう。結局HTMLの基本的なタグを使って何とか書けるところまでこぎ着けた。

レポートは、別に指示したわけではないがたいていワードの添付ファイルで送ってくる。自分ではワードは使わないが、こういう添付ファイル類を読むために結局自分のパソコンに入れておかねばならない。このファイルを一定の形式上の編集を加えた上でホームページに掲載した。学生には今度は他の学生の書いたレポートを読んでそれについてのコ

メントをレポートとして課し、これも再びホームページに掲載した。こちらからコメントする前にまず同世代間の意見の相違や自分の意見を相対化し客観化させてみた方がよいと判断したからである。この作業少しは慣れてきたがそこそこの手間はかかる。20人程度だから何とかできたが、大人数の講義では少し大変かも知れない。作業自体のこともあるが、一般にレポートを課するのは読む側にとってもかなり負担になる。講義と最後の試験だけで評価するのが楽ではあるが、それでいいのだろうかという迷いが未だにある。

それにレポートの成績と試験の結果とは必ずしも比例関係にあるとは限らないことがままある。これだけのレポートを書く学生が本番の試験になると授業内容をどれだけ理解してくれていたのだろうかといぶかしくなる程度の答案を出すこともある。試験だけであれば、あまり迷うこともなく不合格にできるが、レポートでがんばって出席もよければ落とすに忍びなくなるのが人情、しかしこの成績ではどうも・・・、いつも悩まされる。

*

*

*

さて、周辺的なことはこのくらいで切り上げてレポートの中身の問題に入ろう。「反日デモ」にたいする学生の反応は大きく3つに分けられる。そしてそれは私たちが日本で見かけた論調のどれかのパターンを受け継いでいる。

一つめは反日デモを中国政府が国民の不満を外に向けるために容認し、その背景には反日教育があるとする見方である。

「中国国民の中国政府への不満をそらす為にやったのだと定説で言われている通り、私もそうだと思う。5月14日の産経新聞に『中国の現実』のテーマで米有力紙、ウォールストリート・ジャーナルの論説委員で社説面副編集長のメラニー・カークパトリック氏の意見が掲載されていた。彼の意見によると、『中国は日本の教科書問題を民族主義的感情を煽る為に利用しているのだろう。そして歴史の書き換えというのは中国も行っている』とある。彼の意見にもあるように今回のデモは中国政府がからんでいるのは紛れもない事実のようだ。確かに中国は江沢民の政権下において、反日教育を徹底してきた。その時期に教育を受けた世代というのが、今回のデモの中心である若者達（20代～30代）である。インターネットの呼びかけにしても彼らが中心であったことはほぼ確実であろう。そして『愛国無罪』というスローガンを掲げていたのだ」

これは一つの典型的パターンである。『産経新聞』は安価であるためか学生の中に一定の読者層を持っているという感触を持っている。一度購読紙のアンケート調査を行う必要も感じている。「中国政府がからんでいるのは紛れもない事実」という断定をいとも簡単にしてしまう。そして「反日教育を徹底した」ということであのデモの背景を納得するのである。そしてこのような説明は日本側の問題を考える必要がないので容易に受け入れられやすいのだろう。「反日教育」の内容や実態を自分で調べたわけでは勿論ないのに。

第2のパターンは教科書問題、靖国問題での日本の対応に根本的な原因があるとする立場である。「その背景の1つとしては、日本の歴史認識の問題が挙げられ、『つくる会』の教科書が中国や韓国の国民感情を傷つけたことは否めないであろう。また1つは、戦争責任に対して曖昧な態度をとろうとする日本に対する不満が根本にあることを忘れてはならない」「ドイツではユダヤ人迫害により、多くの犠牲者を出してしまったことに対し反省と自らの戒めの意味を込めて、街のいろいろなところに莫大なお金をつぎ込み慰霊碑を建てている。これにより、ドイツの周りの国では、『ドイツは戦争責任を取っているか?』という質問に対して、半分以上の人が『はい。』と答えている。それに対し日本の場合を考えてみると、慰霊碑と思えるものがあまりないように思われる。慰霊碑があるから反省しているとは思わないが、中国、韓国、他の侵略したアジアの国に対しての謝罪の言葉はなかったと思われる。企業などへの資金援助でごまかしている気もする。これでは反日運動が高まっても仕方ないのではないだろうか…」

傾向としては男子学生より女子学生にこのような考えを持つ学生が多いという印象であるが、このような学生は現在では必ずしも多数派とはいえない。これは学生に限らず一般世論の状況を反映していると思われる。

第3のパターンは、日中双方の問題を指摘する議論である。たとえば、「反日デモに対する中国側の主張としては、日本が過去の歴史問題を直視していないことなどを挙げている。例えば歴史教科書問題が挙げられる。特に扶桑社の教科書が問題とされるが。中国側の言い分として、戦争時における日本の従来の自虐的記述が削除されたことである。確かに事実は隠蔽されてはいけないし、日本国民として知っておくことだとは思ふ。しかし、中国側にも落ち度はある。中国こそ最大の民主化運動である天安門事件や文化大革命のときに行われた虐待については教科書に全く書かれていないのである。この中国の態度はいかがなものかと思うが」というように中国の天安門事件や文化大革命の取り扱いを問題にしている。

これらを見て感じるのはまず情報源に大きく左右されていることである。もちろんこれまで受けてきた近代史とりわけ日中関係に関する見方が基礎になるとはいえ、それらはそれほど確固としたものではないから、新しい情報や知見に接するとその影響を受けやすい。別の面からいえば柔軟性を持っているともいえよう。したがって、他人の意見を見て自分の見解の不十分さに気づくということもある。

*

*

*

論点として主要なものを上げると、教科書問題、靖国参拝問題、賠償問題等であるが、まず教科書問題では日本の対応を批判するものとして、「私は日本という国が好きでも嫌いでもないけれど、自分の国で過去に起こったすばらしい出来事も、過去に犯した大きな

過ちも、すべて知っておかなければならないし、それは当然のことだと思う。先日、中山文科相が、「日本の歴史教科書で、日本が他国を攻撃したりしたこと、いわゆる歴史上の“陰の部分”はあまり教える必要はない」とテレビで公言していたのを覚えているが、これを聞いて私はショックを受けたし、腹が立ったし、信じられなかった。そんなことをしてしまえば、日本人が日本の歴史を知らないことになる。つまりこれは、日本が罪を犯したことを歴史から消し去ることと同じではないかと思う」というのがある一方、「教科書問題においても、中国は自国の教科書がすべて正しいとしているが、日本側から見ると、被害を過大に載せたり、大げさに載せたり、事実ではないだろうと思うものもたくさんある。日本の教科書に文句を言う前に、自国の教科書を直せといたい」と反発するものもいる。

靖国神社問題では、「靖国神社は、戦争当時は最も国のことを考えていた人たちが奉られている場所である。結果的に太平洋戦争で、日本がアメリカに敗戦したからその人たちは、戦犯になったのであって、勝っていたら、その人たちは間違いなく国の英雄であっただろう。それが良いことであるか、悪いことであるかは別として、とにかく、靖国神社には当時、心から国を思い、命をかけて、国や家族を守ろうとした人たちが眠っている場所なのである。そのことで中国が、とやかく言うのは筋違いというものではないだろうか。私はこの靖国神社参拝の問題に関しては、中国の日本に対する単なる内政干渉に過ぎないと考えている」これは靖国神社そのものの肯定とそれに基づいて内政干渉という反発を示したものである。ここまで行かなくても「内政干渉」とみる学生はいる。これにたいし、「首相の『靖国神社参拝』においても、A級戦犯者や、近隣諸国に戦前・戦中に大きな被害を齎した指導者・関係者を祭っている以上、首相自らが参拝し続けることで、犠牲となった国々の怒りは膨らみ続けると私は考える」として批判する者もいる。

戦後賠償問題では ODA など「過去に日本はアジア諸国に対し謝罪も賠償もそれなりにした。私は日本が現時点の状況ではもう十分なほどの責任を果たしていると思っている」と考える学生もいる。

最初のレポートに対するコメントを求めた第2レポートを見てみると、自らの考えと異なる考えの存在を知り、自分の視野の狭さを気づくこともある。

情報源についての解説も必要になる。マスメディアにおける『産経新聞』の位置や扶桑社歴史教科書との関係などについては最低限必要なことであろう。自分の意見がどういふ影響を受けているのかを気づかせるのである。これらは一定程度講義で補った。

さて、学生のこれらの議論を見ていちばん問題に感じるのは、いうまでもなく第1番目の中国の内政事情に原因を帰す見方である。これはやはり今年3月韓国盧武鉉大統領が日本にたいし過去にたいする率直な反省を強く求めたときに、小泉首相が「向こうの事情があるんじゃないか」とコメントしたことと軌を一にするといえる。相手側の主張を専ら内政上、政権安定のためのテクニックとしてしか見ない見方である。いわゆる「外交カード」論も場合によってはこれと重なる。学問的には外交を内政との関連において見るのは常識

に属することであり、権力分析としての有用性も否定できない。しかし、そのような分析あるいはリアリズムが、現在の日本では、過去の侵略の免罪符になってしまう危険性も併せもっているという現実をやはりリアルに見つめる必要がある。

単純に中国や韓国の日本批判を相手国の内政問題の延長としてしか見ない立場からは過去の歴史をまともに見つめること、反省することには結びつかず、自分たちを安心させるレトリックとしてしか作用しないだろうし、また、日本の現実には一定の批判を持っていた学生でも、このような主張に触れると、それまで知らなかった見方に新鮮味を覚え容易に受け入れて、現状肯定の立場になってしまうことを学生のレポートを見て痛切に感じてしまう。ある学生が、「私もほかの人のレポートを読むまでは、おおかた日本に問題があり、これから国際化が進むにつれて、また、アジア外交をこれまで以上に進めていかなければならない状況で、日本がほかのアジア諸国に対して、より慎重にしていかなければならない」という意見を大きく持っていた。なぜなら、今回の反日デモについての原因を、ほとんど日本の歴史教科書や靖国神社参拝の影響が強いからだと思っていたからだ。しかし、何人かの人の感想や意見を読んでいくと、本当に原因は日本だけにあるのか、また、中国の日本に対してのデモ、暴動が許されるものであるのかどうかということを中心に考えるようになった。・・・やはり中国の内部事情にデモがなんらかの好都合になっていたのではないかと考えられる。日中関係のあいまいな未解決な問題をつかって内部事情よりも、外部の日本の問題に目を傾けさせたとしか思えないのである。もし本当の理由がそんなことだとしたら私は許すことができない」と書いているのは、まさしくそのような転換が容易に行われることを示している。

学生（学生に限らないが）には、このような問題を国家対国家の関係で見る思考方法が根強くしみついている。国家と国民が矛盾緊張関係にあること、それは日本においても同様であること、国家と国民の無条件の一体化をまず払拭してナショナリズムに足をすくわれないようにする必要性を感じる。

*

*

*

靖国問題については、少し授業でもその歴史についてふれるべきだろうと考えていたが、おりよく高橋哲哉著『靖国問題』（ちくま新書）が出版された。この著者については戦後責任問題を思想レベルから鋭くとらえる論者として注目していたので、早速読んでみた。そして、これは学生に読ませるのに、新書版で値段も手頃だしちょうどよいと判断して、次のレポートの課題としてこの本の読書ノートを提出させることにした。この本は靖国神社についてまったく知らない人にもその問題を解説することを目的として書かれ、かつ論理が明晰で学生にも理解しやすかったと見える。とくに戦死の悲しみの感情を喜びに変える「感情の錬金術」という指摘は学生にとって驚きでもあり説得力を持ったようであった。

反日デモに関するレポートで「靖国参拝問題にしても、戦犯かそうでないかを定める根拠は戦争に勝利したか否かというたったそれだけのものであり、日本の戦争指導者が戦犯であるのならば、他国の戦争指導者も同様に戦犯だといえる。であるのならば、日本の戦争指導者が合祀されているということだけで反日デモに正当性を求める事はできないと思う」と書いた同じ学生が本書を読んで次のように書いている。

「今回私はこの本を読む際に、かなり否定的な考えを持って読み始めた。というのも、私にとっての靖国問題とは中国、韓国などによる内政干渉に対するの怒りが第一にくるものであったからだ。しかし実際には靖国問題とは様々な問題を抱えていて、今になって突然現れたものではないと言う事に気がついた。根本的なところで靖国神社が平和を願い、戦死者を追悼するための施設としてふさわしいのか否か、と言う問題もあり、複雑なものであると感じた。私は、ついつい、目に付く問題に心が奪われがちになるけれども、それに振り回されていては物事の本質を見極める事はできないと言う事に気づかされた」

実はこの学生は昨年の私の別の授業の最後に書かせた感想で、授業内容が「反日的」という感想を書いたかなり「確信的」な学生であるが、そのような学生でも（そのような学生だからといってよい）、適切な読書指導をすれば自分自身の考えの問題点に気づかせることができることを示すものでもあった。

さて、以上大学での教育問題を題材にして書き連ねてきたが、ふり返ってみると本誌上で教育問題が扱われる機会はあまりない。考えてみれば会員のほとんどの人が何らかの形で教育にかかわっているはずであるが。一般に研究者にとっての教育はかなり個人的な営みである。最近大学では授業研究（FDと呼ばれるが、未だにこの名前にはなじめない）が行われているが、内容の問題になると、私の学部（教育学部）のように専門分野の異なる集団の間ではどうもしっくり来ない恨みがある。本誌が教育問題についての情報交換の場となることも期待したい。「随筆」という執筆依頼ということもあり、少し脈絡のない文章になってしまったが、私のこのつたない文章が「抛磚引玉」になれば幸いである。（2005年7月31日）

（そえじま しょういち・和歌山大学）